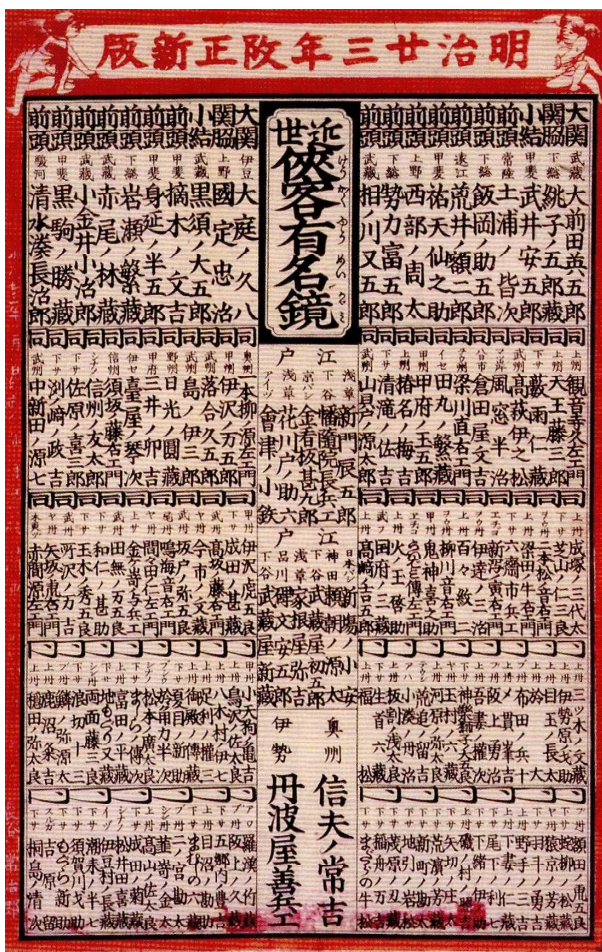


俠客・高萩の万次郎

山口正義

一、はじめに

「吃安こと俠客竹居安五郎」については別項で述べました。この安五郎、島抜けの身ながら郷里の竹居村に戻り九年余り活躍しました。役人たちの捕縛作戦は悉く失敗し、やっとのことで安五郎を奸計を以て捕縛したのは二足の草鞋の「国分の三蔵」らでした。この三蔵、調べると意外な人物でした。



近世俠客有名鏡（明治23年版）⁽¹⁾

この三蔵、もとをたただせば「高萩の万次郎」だということです。万次郎は関八州に知られた飯能を本拠とする大物の博徒、高萩とは日高市高萩です。本当か。そして、万次郎は清水次郎長（本名・山本長五郎、文政三〇明治二十六年）を呼び捨てにできたという話もあります。そういう間柄の親分だったということです。

「近世俠客有名鏡」というのがあります。江戸時代の俠客番付で、明治二十年代に発行されたものが幾つかネット上や書物で見られます。明治二十三年のものでは国定忠治は関脇、安五郎は小結、清水次郎長は前頭です。武州でいえば黒須の大五郎（入間市黒須）は小結、赤尾の林蔵（坂戸市）・高萩の伊之松（日高市）・中新田の源七（鶴ヶ島市）・高坂の藤右衛門（東松山市）・坂戸の弥五良（坂戸市）・所沢の万吉（所沢市）などは前頭で名を連ねていて大変興味深いです。しかし、どういう訳か高萩の万次郎の名はありません。が、前頭の「伊沢ノ万五郎」が後述するように万次郎の変名ということらしい。

本稿は高萩の万次郎を中心に述べますが、関連人物として近郊の双柳の清五郎（飯能市双柳）、嶋田増太郎（飯能市飯能）についても簡単に触れます。

二、国分の三蔵は高萩の万次郎か

『博徒の幕末維新』⁽²⁾（2004年刊）は新書版で信頼性は高い本です。その中で、安五郎の捕縛に活躍した国分の三蔵について次のようにいいます。筆者はこれを読んで一時信じたのですが…。

* * * * *

国分三蔵は関東取締出役の手先と言われ、実は変名で武州高萩を根城とする万次郎という名うての二足の草鞋の博徒であった。三蔵は関東取締出役の密命を帯びて甲州入りし、国分村に定着して活発に活動する。更にこれに上州館林の二足草鞋の手先江戸屋虎五郎が加わったという。（安五郎捕縛の）八州廻りの作戦は博徒の対立出入りの構図の中で機を見て捕らえようとするゲリラ的手法である。因みに清水次郎長は高萩万次郎とは切って切れぬ盟友であり、国分三蔵とも気脈を通ずる間柄である。

* * * * *

尤もこの本以前の『日本俠客一〇〇選』(1971年刊)も国分の三蔵を高萩の万次郎としていますし、先の「近世俠客有名鏡」には前頭で「武フ国府ノ三蔵」とあり、国分の三蔵は武州人であるかのようです。

このような事からかなり前から国分の三蔵すなわち高萩の万次郎説が生じたのかも知れません。笛吹市にはまるで小城の石垣であるかのような「三蔵屋敷」跡が遺っていて、「高萩出身の三蔵」との説明板まであります。

しかしこの説には矛盾もあります。この世界は口伝・伝聞が中心で当然史料は少なく、科学的根拠に欠けるきらいがあります。安五郎捕縛後、三蔵は黒駒勝蔵と敵対し出入(騒動)を繰り返して、行方をくらまし「逃げの三蔵さん」ともいわれ、最後は元治元年に勝蔵に惨殺されたとの話もあります。その出典根拠は不明です。一方で新出史料の発見で慶応三年頃までは活動が確認されているともいいます。そして、『博徒の幕末維新』と同じ著者は『アウトロー近世遊俠列伝』(2016年刊)の中で、「国分村(笛吹市)の三蔵(中略)、三蔵は関東取締出役の密命を帯び、国分村に定着、道案内の上州館林の江戸屋虎五郎、武州高萩(日高市)の万次郎が出入りしていた」と、ここでは三蔵と万次郎は別人物として描いています。一方で虎五郎と万次郎は道案内人として安五郎捕縛に関係しているとしています。恐らくこれが高いのかも知れません。

三、高萩の万次郎の人物像

さて、万次郎の人物像については村松梢風による『正伝清水の次郎長』に略伝がありますので、いまその一部を転載してみましよう。

* * * * *

此の高萩の万次郎と云う人は、当時関東切つての大親分で、高萩一家と云えば此の社会に於ける大きな勢力だった。一例を話すと、其の頃東海道と中仙道とに各二ヶ所づゝ高萩一家の出張所が出来て、年中万次郎の子分が其所へ詰めていた。東海道は原と三島に、中仙道には天神橋と揚(上)尾にあった。つまりそういう遠方の土地にある縄張の監督をする為で、どんな者でも旅人がそれへ尋ねて行けば一宿一飯を振る舞った上に草鞋銭の二貫や三貫は持たせて遣るのが例になっていた。

膝元の飯能の高市たかまでは関東一の大博奕が行はれた。其の一日のカスリだけで万次郎の家は一ヶ年を支えることが出来たと云う位だ。

次郎長は後に此の人と兄弟の盃をして、彼の弟分になった。万次郎の方が齢も十五ばかり上で、俠客としての経歴では遙かに先輩だった。元来万次郎は俠客と云い乍ら筋目正しい家に生れた。彼は先祖代々高萩宿の名主を勤めて来た。父の弥五郎と云う人までは二人扶持を貰っている名主だったが、此の弥五郎はそういう身分にも似ず賭博が飯より好きで、博徒共を自分の家へ伴れてきて賭場を開いたりした。親父からそういう有様だから伴の万次郎が邪道に踏み込んだのも無理はない。

其の頃高萩宿に伊之松と云う俠客があった。これは赤間の林蔵を殺して兄弟分の仇を討って売り出した男だった。万次郎はこの伊之松の二代目を相続して所謂高萩一家の頭梁となったのだ。万次郎の代になると、高萩一党の勢力は関八州の俠客を圧倒してしまった。府中の田中屋万吉、小金井の小次郎、小川の幸蔵などと云う俠客は皆万次郎から盃を貰った弟分だった。万次郎は他の俠客と違って身分もあり且



三蔵屋敷 (笛吹市一宮町)

説明板には「ここは武州高萩出身の三蔵が住んでいた処で三蔵屋敷と呼ばれます。三蔵は竹居の吃安など甲州の博徒を捕える為に関東取締役の手先として入って来ました」とあります。(2017年5月)

つ十手捕縄も預かっていた関係から官辺の方とも連絡がついていたので、どんな兇状持ちでも、此処へ隠してしまえば大抵は安全だった。八州の役人が日光街道を通行する時、高萩の宿だけはわざとよけて裏道を通ったと云う位だ。万次郎の家は宿の中央にあつて堂々たる構えだった。

処で、此の万次郎は、屋号を鶴屋と云い、本名は喜右衛門と云うのだった。其の土地へ行くと現今でも鶴屋喜右衛門と云う名で人が知っている。が他国へ行くと高萩の万次郎で通っていた。万次郎は幼名なのかそれとも何かほかの訳があるのか不明だが、とにかくそう呼ばれていた。

次郎長は、虎三、直三、千代松の三人の子分を伴れて此家の客になつていたが、万次郎が深切である上に其の女房が駿府研屋町の者だったので、よく話が合つて居候をしているにも気が置けなかった。

* * * * *

「正伝」とありますが、この書き方は必ずしも考証的なものではなく、どこまでが真実か不明のように思えます。例えば「飯能の高市たかまちでは関東一の大博奕が行はれた」とあります。飯能の市では六斎市の「縄市」が『飯能市史』に述べられていますが、素人考えでは例え博打とはいえ関東一になるような規模の市だったのか疑問が生じます。ただ、『清水次郎長とその周辺』の著者は「高萩を踏査してみても、ある程度の真実を伝えたものだということがわかった」とも述べていますから、全体としてはそれなりの信憑性はあるということでしょう。

なお、文献(3)等によれば、万次郎は藤久保重五郎(力士出身で獅子ヶ嶽重五郎ともいいます。川越を縄張りとししました)とは兄弟分で、江戸屋虎五郎、藤久保重五郎とともに関東取締出役の道案内人(二足の草鞋)を務め、前述のように文久元年には安五郎の捕縛に携わつたとされます。これ以前に、万次郎は虎五郎と共に甲州に入り、万次郎は万五郎と名を変え、虎五郎はそのまま通したともいいます。石和で過ごすこと二年余り。この為石和の博徒と思われ、先の「近世俠客有名鏡」の番付には前頭九枚目に「伊沢ノ万五郎」、同二十枚目に「伊沢ノ虎五郎」とあるということです。どこまでが真実でしょうか？

また、「本名は喜右衛門」とありますがこれはその通りです。後述の万次郎の墓石によれば、「明治十八年五月廿二日 行年八十一才 俗名清水喜右エ門孝信」とあるからです。

高萩宿は天正年間に成立したとされ、二と七の日に市が開かれていたことや、千人同心の人馬継立場となつたことなどで賑わつた宿場であつたといわれます。「八州の役人が日光街道を通行する時、高萩の宿だけはわざとよけて裏道を通つた」というのも宜なるかなです。

一方、赤間(尾)の林蔵を殺して兄弟分の仇を討つて売り出した男とありますが、実際は林蔵との縄張り争いや恋のサヤ当てなどから伊之松は林蔵に殺されています。伊之松の墓は高萩の谷雲寺こくうんじにあり、それには「享和二壬戌 九月九日」「快動大震禪定門」とあります。また万次郎は伊(猪)之松の二代目を相続したとあります。後述のように万次郎の生まれたのは三年後の文化二年と推定できま

すから、継続性を以ての二代目相続は不可能です。二代目を継いだにしてもその間の縄張りなどは誰かが守ることにあります。文献(10)はその人物を伊之松と兄弟分の盃を交わした武州で著名な親分・寺谷(吉沢)善太夫であつたとされています。善太夫らを顕彰した碑(三俠碑と仮称)の台石にある世話人の筆頭には「高萩清水喜右衛門」(万次郎の本



赤尾林蔵の墓
(坂戸市赤尾、旧光勝寺)
正面に「文化元甲子天 櫻樹院道秀了覺居士靈位 三月中三日」、左側面に「武州入間郡赤尾村俗名山崎林蔵 行年二十六歳 施主同人妻むら 同山崎岩五郎」とあります。高坂の藤右衛門を殺して名を挙げ、伊之松と縄張りを争う。越辺川に私設の堰を造って利権を得ていました。伊之松を殺害したが2年後伊之松の子分らに仇を打たれました。(2017年6月)



高萩伊之松の墓(谷雲寺)
正面に「享和二壬戌 快動大震禪定門 九月九日」、左側面に「施主清水留五郎」とあります。文献(9)の中の「剣術門弟帳」の神文には甲源一刀流逸見太四郎代師比留間与八門人として高萩村清水留五郎の名があります。留五郎は甲源一刀流を習っていたでしょう。(2017年6月)

名。二番目に次郎長の名があります。とあるのもその事を補強しているように思えます。

以上は『正伝清水の次郎長』の略伝をもとに展開しましたが、地元の資料として文献(11)があります。次にその一部を転載させていただきます。

* * * * *



三俠碑(仮称)

正面は右から「高砂勇吉」「寺谷善太夫」「久下長八」とあります。台座1段目左側面に世話人として「高萩清水喜右衛門」(高萩万次郎)、「駿州山本長五郎」(清水次郎長)、「駿州宮下仙右衛門」(増川仙右衛門)、「甲州宮沢文吉」(津向文吉)、「小川笠間幸三郎」(小川幸蔵?)ら錚々たる俠客名があります。他の面にも名前が沢山あります。高さ2.5mの重量感ある碑。明治16年に吹上地区に建立され現在は鴻巣市の円通寺にあります。(2017年6月)

「鶴屋」を屋号とし、旅籠を経営するとともに、扇町屋村組合59ヶ村(入間市・狭山市・日高市の一部)から選ばれた関東取締出役の道案内(十手持ち)でした。所沢村組合、拝島村組合、飯能村組合などの近隣の十手持ちとも親交があり、これらの組合村内の石碑等に多く名前を残しています。先代の喜右衛門こと父弥五郎は名主でしたが、文化九年退役。時に万次郎八歳であったため組頭井上文八が名主役に就きました。万次郎は高萩宿では宿役人の「年寄」を勤め、文久元年の和宮下向の際、中山道熊谷宿からの助郷命令書が届いた折には、宿役人年寄として問屋とともに熊谷宿へ赴き助郷免除を歎願しています。また慶応二年の武州一揆の際は、宿はずれに出て一揆衆に酒や飯を振る舞い、高萩宿での打ち壊しを回避させています(後述)。

俠客としても有名で、近隣の俠客から一目置かれるとともに清水の次郎長とも親交がありました。若かりし次郎長を匿ったことが縁で、その親交は喜右衛門の晩年まで続きました。(略)「鶴屋」は「亀屋」の向かい側にありましたが、旅籠としては明治九年までには廃業し、明治十二年末以降のところで下宿から上宿に転居しています。「鶴屋」の建物は昭和八年に焼失しました。

* * * * *

この内、和宮下向の際の助郷について、文献(9)の中の「中仙道助郷一件写」は次のように述べています。「中仙道熊ヶ谷宿より之 御印状二付、不取敢翌十一日年寄喜右衛門問屋伝蔵外老人之者熊ヶ谷宿役人鯨井茂兵衛方江罷越、前願(上尾宿の助郷免除願いを指す) 手続ヲ以種々歎入候処右は重キ御用筋ニ而皆御免除と申事ニは候得共喜右衛門外式人より歎入之次第も有之候二付(後略)」。

これは村役人として村のために活躍する姿であり、博徒とは違う一面を示しています。こういったことが「強きを挫き弱きを助く」のイメージと重なり、俠客たる所以なのでしょう。赤尾林蔵のような単なる凶暴な博徒とは異なるものです。

なお、ネット情報から秋津神社(東村山市秋津)の灯籠の台石に万次郎の名前があるということを知りましたので訪れてみました。



旅籠鶴屋跡(現在再建中)

高萩のJR川越線ガード下近くにある。安政5年の石灯籠は傾き、慶応2年に「喜右衛門信孝」が建てた金毘羅大権現の石碑は跡形もなく割れている。道路を挟んだ反対側には旅籠亀屋があった。(2017年3月)

この灯籠は安政五年(一八五八)のもので高さ二メートルはある立派なもの。発願人は上安松村(所沢市)の高田某とあります。上安松村と秋津村は隣接しています。台石の「燈籠奇進連名附」には近郊の十七名の名主と、それに字下げして二十

名程の名があります。名主はトコロサワ(所沢)・タナシ(田無)・ハイシマ(拝島)などの名主で、中には有名なフチウ(府中)・田中屋丑之助、ナイトウシンシユク(内藤新宿)・高松喜六、(日野)問屋(佐藤)彦五郎、タチカワ(立川)問屋(鈴木)平九郎などの名もあります。字下げした名はカハコ(川越)・鶴松、イシ井(坂戸)・関内、ヒロヤ(川越?)



秋津神社灯籠

関治郎、タカハキ(高萩)萬治郎、モロオカ(青梅孫八、アサカ(朝霞)力蔵などです。鶴松は川越の目明かしとして有名で、この字下げした名の人達はいわば十手持ちの親分なのでしよう。名主・問屋と親分達の寄進は当時の治安維持を物語るものでもあります。ここでは万治(次)郎は先の「三俠碑」とは異なり権力側の末端に名を寄せています。まさに二足の草鞋です。

また、飯能の万福寺には万次郎らが安政六年に奉納した手水石が残っています。そこには「師岡の孫八」(内野孫八)の名も見えます。



万福寺の手水石側面(右端に清水万次郎、中央に内野孫八の名がある)

四、清水次郎長との関係

清水次郎長の伝記といえは天田愚庵の『東海遊俠伝』それなりの信憑性があります⁽¹²⁾。それによれば次郎長が高萩に來たのは二回あります。万次郎を頼って高萩に來た一回目は弘化二年(一八四五)のことです。

この年、次郎長は甲斐國の津向の文吉と次郎長の叔父・和田島太右衛門の間の駿河庵原川での出入り(騒動)を調停しています。次郎長二十五歳の時です。この出入りは三馬政の計略であったと言われ、それがバレたことにより三馬政は、津向の文吉と和田島太右衛門と清水次郎長が大変な喧嘩を行ったと奉行所に駆け込んだ。これにより次郎長は逆に國を売るはめになったというのです。國を売るとは逃亡することです。小田原經由で次郎長は高萩に向かった。そのときに面白い話があります。小田原で義理のかたい男が次郎長一行をもてなそうとして、一行が寝ている間に衣類を質に入れて博打でもてなし金を稼ごうとしましたが失敗し、その結果一行は裸道中になってしまったというのです。高萩に着いて何とか旅籠亀屋に入ったものの、無一文がバレてしまいます。亀屋は気味悪い奴らが泊まっていると万次郎の鶴屋に知らせます。ここで『東海遊俠伝』は次のように述べています。

* * * * *
 時二長五ノ結義兄弟、清五郎ナル者、久シク万次ノ家ニ客タリ。之ヲ聞キ猶其長五ナルヲ知ラズ。大ニ怒リ右手ニ一條棒ヲ提ゲ、左手ニ一貫錢ヲ拿シ、走テ亀屋ニ至リ、大ニ罵テ曰、「何物ノ疍兒(疍乞食)ゾ、(略)此ノ条棒ヲ喫セシメン」ト。直チニ梯子ヲ跑踏シテ來ル。長五之ヲ見レバ、則チ清五郎ナリ。清五失驚シテ曰、「兄弟乎何ノ為メニ此ノ如キ」。長五曰、「一言尽シ難シ。且ツ我が説ク所ヲ聞ケ」ト。(略)清五嘆ジテ曰、「俠者潔白ヲ貴ブ。此事何ゾ愧ルニ足ラン」ト、引テ万次ノ家ニ至ル。万次相見テ大ニ歎ビ、遂ニ之ヲ上客トナス。

長五は勿論次郎長ですが、その次郎長と義兄弟を結ぶ清五郎は後述する「双柳の清五郎」です。二回目は安政六年(一八五九)六月のことです。この年、裏切りの保下田の久六を亀崎付近奥川(乙川)で斬殺、追われて甲斐へ逃げ、その後高萩に逃れて來ます。次郎長三十九歳、万次郎五十五歳のときです。そのときの様子は『東海遊俠伝』によれば次のようにあります。

* * * * *
 是ニ於テ一行六人、武蔵ニ行き、高萩ノ万次郎ニ依る。長五刀ヲ出シ、之ヲ視シテ曰、「缺上凝血、已ニ拭フ可カラズ。刀身亦幾処痕跡アリ。当ニ之ヲ如何ンスベキ」。万次乃チ携ヘテ飯能ニ至リ、刀商ヲ見テ曰、「我レ近^{ちか}ロ四口刀ヲ求メ、一犬ヲ得之ヲ試ム。如今之ヲ卿ニ托シ、以テ修繕セントス。敢テ問フ諾スルヤ否ヤ」。刀商曰、「謹テ命ニ從ハン」ト、包ヲ解テ之ヲ見ル。血痕未ダ乾カズ、刀刃鋸ノ如シ。即チ色ヲ失シ、大ニ驚テ曰、「能ハズ。能ハズ。上帝上ニ在リ、小人実ニ能ハザルナリ」。万次曰、「汝何ヲ能ハズト言フヤ。我レ其初メニ当リ、早ク已ニ汝ニ約ス。汝輒チ之ヲ肯ジ、謹テ我方

命ニ從ハント言フ。唇頭未ダ乾カザルニ、敢テ之ヲ能ハズト言フ乎。刀商曰、「老爺言フ唯犬ヲ屠ルト。小人故ニ之ヲ諾セリ。如今其刃ヲ見ル。実ニ犬豚ヲ屠ル者ニハアラザルナリ。敢テ謹テ之ヲ謝ス」ト。万次大ニ怒リ、即チ喝シテ曰、「汝如何ゾ我ヲ欺ク。我レ万次ニシテ、犬ヲ試ムト言ハゞ、則チ犬ナリ。何ゾ然ク少覲スルヤ」ト、其刀ヲ執テ起ツ。刀商驚キ謝シ、遂ニ之ヲ諾ス。既ニシテ成ル。長五等大ニ喜び、深ク万次ニ謝シ、將ニ辞セントス。万次 贖スルニ二百兩ヲ以テス。六人乃チ上野ヲ望テ去ル。

わかりづらい箇所もあります。ここを解説したものは中々見当たりませんので『正傳清水の次郎長』を参考にしよう。次のようにありますが、物語風の同書は冗長度を増しますが面白い。

次郎長も三人の子分も亀岡（亀崎？）以来の刀を持っていた。だれの刀も刃がこぼれていたが、次郎長の井上眞海（真改？）は丁度鋸のようになっていた。

『万次郎さん、私共の刀がこんなになっちゃったが、何とかありませんまいか』と云ってそれを見せると万次郎も駭いて、『成る程劇しくやったものだな、ぢやあ一つ磨ぎに掛けてやらう』と云って、飯能に庄兵衛と云ういゝ磨ぎ師がある。これへ使をやって自宅へ呼び寄せた。

『庄兵衛さん、俺は近頃刀を四振買い込んだが、此の頃、犬が喧しくて仕方がねえからぶった斬ると刃こぼれがした。一つお前さんに磨いで貰い度い』『宜しうございます。一つ拝見致しませう』

『是れだ』と万次郎が例の井上眞海の業物をそれへ出すと庄兵衛は手に取って鞘を拵って見るなり顔の色を変えた。

『貸元さん、これあ磨ぐことはできません』『何故だ』

『何故って、貴方は今犬を斬ったので刃がこぼれたと仰しやったが、是れは、犬を斬った刀ではありません。是れは人間の血のりです、こんな刀を磨ぐと私の手が後へ廻ります』

『おい庄兵衛さん、妙なことを云うと承知しねえ、俺が犬を斬ったと云ったら犬の血に違へねえのだ。

一旦こう云って刀を見せた以上は、黙ってこれを磨ぎやよし、厭だと云うならお前を此處から歸しやあしねえ』『貸元それあ御無理です』

『無理でも何でも磨いで貰い度い、さアどうだ』

万次郎は脇差を持って起ち上った。庄兵衛は脅かされて仕方なしに磨ぐことになった。勿論そんな刀を家を持って行って仕事をするわけにはいかなから万次郎の処へ幾日も泊りこんで磨ぎ上げた。

（略）次郎長が万次郎に礼をのべて暇を告げると、万次郎は百兩の草鞋銭を出した。

『東海遊俠伝』にしても、『正傳清水の次郎長』にしてもどこまでが真実かわかりづらいですが、大筋では「真実」に近いように思えます。

五、万次郎の晩年

万次郎の晩年の詳細も不明ですが、幾つかの話を紹介したい。

『武州ぶっこわし実記』には武州世直し一揆で、高麗・坂戸方面への記述の中で、吾野郷六ヶ村から集まった一揆勢が途中の村々で人数を増しながら高萩村に入ろうとしたとき、一揆勢の先頭の者と「鶴屋喜左（右衛門（高萩万次郎）」との間に村を通過することに関して緊迫した問答のあと、喜左衛門側が用意していた料理を振る舞い無事に村を通過したことが物語風に書かれています。が、この書物は出典などの記載がありません。信憑性を確認すべく調査してみると、『武州世直し一揆史料（一）』の中にある「栗坪村関根家文書」に

次のようにあるのを見つけました。一揆勢が喜右衛門（万次郎）から宿はずれで「酒振飯」を馳走さけぶりめしになつて
いるのです。万次郎六十二歳頃のことです。

* * * * *
我野（吾野）谷百姓共者同月（慶応二年六月）十四日駈集り高麗宿差而來ル、こま町ニ而幸次郎と而北
嶋御殿御用御貸所散々打破り（略）、夫々下鹿山村栄助と云名主ニ而北嶋御殿貸付并質屋商売致候者打
毀し、質物者庭迄なけ散し諸帳面を引きさき疊を切、つり天上つきはなし土蔵のこしまきを破り角柱を
切り、其の有様者天狗之仕事ニ而も有かと思ふ程之仕事なり（略）、四方八方人足分レ行、高萩を差テ
行たる人足ともハ高萩ニ而男之面をミかく者鶴屋喜右衛門とテ無職親方宿はづれ江出、御無しん致しけ
る、人足共無しんと有者喜右衛門にまかすへしとて酒振飯の馳走に成、其坂戸宿江行所々江分候て人
足共皆落合来ル

* * * * *
これにより、『武州ぶっこわし実記』の話がある程度裏付けられたこととなります。また、古文書に具体的
に名前が書かれていることにより万次郎のことがより身近になります。尤も文獻(9)の中の「武州飯能寄場
打ちこわし一件筆記」には、「飯能村寄場之内高麗郡栗坪村幸次郎・清流村名主伊助（略）下鹿山村（新田）名
主栄助・与頭熊太郎打こわし、夫より扇町屋寄場・高萩村名主文八を打毀し云々」とありますから高萩村が
無傷であつたどころではなく、名主の家が被害にあつていようです。

武州一揆の際、俠客が住民側について一揆勢と対峙して活躍した話は後述の双柳の清五郎の場合にもあり
ます。

次は『毛呂山町史』⁽¹⁵⁾にあるものです。同書には「毛呂郷中強談始末書」（慶応四年五月）なるものがあり
ます。幕末の世情不安の中、無宿無頼が横行し各地で乱暴狼藉が行われましたが、その状況を伝える一例で
す。その中に次のようなくだりがあります。

* * * * *
無宿無頼の悪党共党を結び、（慶応四年）四月十一日高麗郡なんぼんと申す物持方に人数百人斗り押寄
せ、強談難問を申し懸け、土蔵戸前を打毀し、質物持出し勝手に近辺のものに捨与え、乱暴狼藉言語同
断の上、宅に酒食申しつけねだり食なし、字天神山と申す山中に屯いたし、昼は各々四方に散乱し夜毎
に百人余相集まり、毎夜毎夜近隣物持共をおびやかす百姓農業相欠き難渋いたしけるに、高萩萬五郎と
申す者仲人に入り金百両趣意金請取相静まりけり。

* * * * *
ここに出て来る「高萩萬五郎」は高萩の万次郎のことではないかと筆者は推測します。
また後述の、慶応三年と推測される飯能で行われた相撲興行の番付の世話人四名の一人に「鶴屋喜右エ門」
の名があり、相撲興行を取り仕切ったことがわかります。

これら三つのことは、ともに俠客らしき行動のように思えます。
さらに『清水次郎長とその周辺』には、万次郎は次郎長を呼び捨てにできた親分であつたことを次のよう
に述べています。

* * * * *
大政が歿した年というから、明治十四年のことだろう、万次郎が次郎長のところへやって来たそうだ。
繰ってみると万次郎が七十七歳、次郎長が六十二歳のときである。このとき、次郎長は万次郎を「親分」
と呼んだが、万次郎は「次郎長」と呼び捨てだったので、清水一家の若い者たちが吃驚びっくりしたそうである。
だが、ありていに言えば、二人の間にはそれほど貫禄のちがいがあつたのだ。

* * * * *
なお余談ですが、『清水次郎長とその周辺』には万次郎の写真が載っています。写真は高萩で「亀屋」とい
う屋号で割烹兼旅館業を営んでいた家にあつたものといえます（現在の当主は原田昭様）。同家には次郎長と

山岡鉄舟の写真もあるといい、写真の経緯が詳しく書かれています。それによれば次郎長と山岡鉄舟の写真は天田五郎（愚庵）が撮影し、万次郎のものは浅草奥山の写真屋・江崎礼二（下岡蓮杖に師事している）が撮影したと推測されています。

六、万次郎の墓

ネットを駆使して高萩の万次郎を調べると墓の場所も判明しました。谷雲寺の墓地ではなく、清水家の墓地のようです。高萩の交差点を少し川越寄りに行った道路脇にあります。

墓地中央に少し大きめの同じ大きさの墓が二つ並んでいて、向かって右（東側）の墓の正面中央に、「篤翁大儀居士位」

と大きくあり、右側面に、

「明治廿五年六月廿八日 悟翁貞道大姉」

「明治十八年五月廿二日 行年八十一才 俗名清水喜右エ門孝信」とある。左側面には、

「高萩村 孝子 清水仙太郎 商人身内中 寄子中」

とあります。家紋は「丸に立ち沢瀉」。

向かって左（西側）の墓は、正面に、

「徳生大勇居士 徳室妙然大姉 霊位」

とあり、右側面に、

「男 嘉永二己酉年三月廿五日」「女 慶應元乙丑年十二月七日」

とあります。左側面には、

「施主 商人身内中 門人中 高萩邑 清水万次郎」

とあります。この内容から右が万次郎の墓、左が両親の墓であるのは明らかでしょう。右の墓の亡日と行年から逆算すれば万次郎は文化二年（一八〇五）生れとなり、「清水喜右衛門孝信」が本名でしょう。『正伝清水の次郎長』は正しいこととなります。尤も文献(11)には「文化二年六月十四日生」とあり、また文献(16)には旅籠鶴屋跡の石碑「金毘羅大権現」の裏面に「慶応二年丙寅冬十月吉日 願主喜右衛門信孝」とあると記述しています。



万次郎の墓(右)と両親の墓(左)
(2017年6月)

さらに両親の墓の西側には少し小さ目の万次郎の祖父母の墓があります。それには「施主 高萩邑 清水弥五良建之」とあります。弥五郎は万次郎の父であり、このことも『正伝清水の次郎長』は正しく書いています。

なお、『正伝清水の次郎長』は既述のように万次郎の女房は「駿府研屋町の者だった」と述べていますが、『清水次郎長とその周辺』では日高町役場高萩支所にある除籍の原本を見て、「静岡県宇戸郡麻屋町二丁目平民亡白金義平二女 喜右衛門妻 清水カノ 文政六年十二月二十五生れ」との記載を確認しています。研屋町と麻屋町の違いはありますが、何れにしても万次郎の女房は清水から来ているのは間違いないようです。偶然なのか必然なのか不思議な縁です。

七、双柳の清五郎と嶋田増太郎

「はんのう市史編さんだより 第23号」に、当時の市史編さん調査員の島田欽一氏による「一枚の相撲番付から」と題する興味深い文章があります。飯能で行われた巡業相撲の相撲番付をもとに、世



相撲番付⁽¹⁶⁾

話人について述べているものです。番付の力士名などから相撲は慶応三年に行われたとしていますが場所は特定されていません。が、『飯能市年表』¹⁸には文久二年六月に「飯能村、久下分村の鎮守熊野権現修葺のため相撲興行をした旨両村名主等が岡役所へ願ひ出る（双木家）」とありますから、あるいは場所と同じ場所（現在の久下稻荷神社）かも知れません（蛇足だが同年表には「明治五年一月六日に飯能村で相撲興行催される（催金二四〇両）（大河原重家）」ともありますので五年おきに開催されています）。

番付によれば世話人は四名で、松田屋弥兵衛、鶴屋喜右エ門、並柳清五郎、松井戸増太郎とあります。この四名は当然興業を取り仕切った土地の顔役で、貸元、親分と呼ばれていた人たちです。最初の松田屋弥兵衛については金子元、興業の資金元ではないかと推測されているのみですが、並柳（以下双柳とする）清五郎と松井戸増太郎については興味ある話を展開しています。以下、この資料と『清水次郎長とその周辺』を参考にして述べます。

双柳の清五郎は飯能市双柳の人。本名は都築竜蔵。清五郎にも武州一揆の際、「双柳には親分がいたので、村内へ指一本触れさせなかつた」という話があり、また年令からしても万次郎の弟分であったと言われます。また、目つかちだが、器用な人で百姓仕事をやらせても熱心だし、手際がよかつたといえます。

次郎長も一目置いていたということで、明治四年、たまたま清水へ出掛けていて、逗留先の次郎長のところで亡くなっています。聞くところによると、「碁を打っていて……」ということから、脳卒中ではなかつたかと述べられています。

【清五郎の二つの墓】

清水の梅蔭寺（現・静岡市清水区）に次郎長が建ててくれた清五郎の墓があるというのを知り筆者は訪ねてみました。次郎長の墓には大政・小政などの子分の墓も一緒にあります。中央の「俠客次郎長之墓」から右に「俠客石松墓」「俠客大政墓」「俠客小政墓」「俠客仙右（エ門墓）」と並んでいます（カッコ内は文字欠けあり）。清五郎の墓は小振りであつて右手奥、仙右エ門の墓の後ろにありました。

正面には「乾叟清元上座」とあり（「上座」は戒名の位号の一つ）、右側面に「明治四年正月十一日」、左側面に「武州 俗名 清五郎」とあるのを確認しました。まさに双柳の清五郎の墓です。なお、梅蔭寺の過去帳には「行年六十一歳」「上町 次郎長 客」とあるといえます。これにより文化八年頃の生まれと、次郎長の客分扱ひだったことがわかります。

清五郎の墓は飯能市双柳の秀常寺の都築家の墓地にもあります。読めない字もありますが次のようにあります。

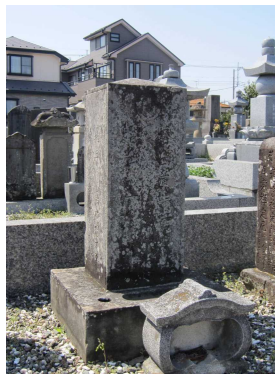
正面に「春岳道清信士 智岳妙實信女 位」、左側面に「施主 嶋田増太郎 都築□□女」、右側面に「春明治四辛未年一月十一日 俗名 清五郎 行年六十一歳 智 明治十八年十二月十一日 □□□□ 行年六十一歳」までは何とか読めます。後半の不明字は『清水次郎長とその周辺』によれば「俗名 ウタ」であろうか。そして嶋田増太郎は次に述べる松井戸増太郎です。

清五郎の妻もまた清水の人であつたといえます。

松井戸増太郎の松井戸は小字名から取っています。嶋田増太郎が本名で、墓は天覧山麓の浄水場の登り口の右手の嶋田家の墓所にあります。正面に「俠 嶋田増太郎之墓」とあり、高さ二メートル程の立派な墓石です。堂々と「俠客」と大きく刻してあります。左側面に「施主 嶋田安太郎 青梅町 海藤とら 島田金蔵」、右側面に



嶋田増太郎の墓
(2017年4月)



秀常寺の清五郎の墓
(2017年4月)



梅蔭寺の清五郎の墓と左側面（「武州 俗名清五郎」とある）
(2017年5月)

「慈涉最博居士 梅林清香大姉 大正四卯年六月廿日増太郎先妻 俗名志
 け 七十七才 明治三十四年五月十五日」とあります。裏面には「辞
 世 浪風もあらしも無事な我身にて けふハわかれそ五月雨の旅」
 とあります。波乱に富んだ人生を想像させますが、詳細は次のこと
 しかわかりません。

* * * * *
 明治二十六年六月十二日の清水次郎長の葬儀には飯能から三人が駆けつけていて、その際の諷経帳（香
 奠帳）には、「金拾円也 飯能 嶋田増太郎 行平仙太郎 細田和十郎」と明記されている。行平仙太
 郎は飯能市長沢の人で、墓石の台座に近郷近在の任侠につながる人名が列記しており、冒頭に飯能嶋田
 増太郎、次に高麗細田和十郎とある。

* * * * *
 筆者は諷経帳の存在と見学可能までは確認しましたが、まだ見学に行けないでいます。なお、行平仙太郎
 は明治三十一年二月に亡くなっています。松岳永昌居士。飯能市長沢の玉宗寺に墓があり訪ねました。

八、おわりに

博徒は無宿とも言われ、御禁制であった博打を生業とする人達で、平安時代末期から存在が確認され、鎌
 倉時代には幕府から禁止令が出されているといえます。江戸時代後期には各地で多くの博徒が横行し、無宿
 や欠落（逐電）が発生しています。それは幕府の経済政策の失敗による権威の失墜とも関係しています。博
 徒は博打の他に養蚕、生糸、漁港、舟運、街道筋、木材など金になる事業に絡むことになりました。飯能、日
 高近辺では木材が対象になったのでしょうか。赤尾林蔵が越辺川に私設の堰を造って利権を得ていたというの
 もその一例です。

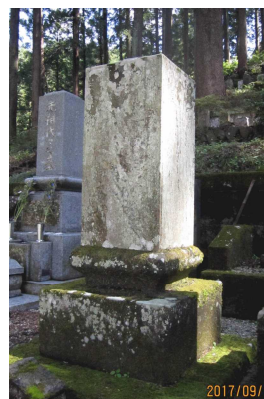
世情が不安定化する中で、一部の博徒は義侠心からか地域の治安に関係して行動するようになります。村
 もそれを頼りにしているかのようです。武州一揆の際、高萩の万次郎や双柳の清五郎が住民側について一揆
 勢と対峙したという話はそういった事例でしょう。有名なところでは小川の幸蔵（東京都小平市小川）もそ
 うでした。単なる博徒ではなく俠客なのです。俠客とは強きを挫き弱きを助ける任侠を建前とした渡世人で、
 任侠とは仁義を重んじ困っている人を体を張って助ける自己犠牲的精神、と辞書にあります。正史で取り上
 げられない博徒や俠客の稗史の世界にも見るべき真実はあるということとです。

尤も万次郎は元々、高萩村の年寄・名主としても活躍していますから単なる俠客でもありません。幾つか
 の古文書はそのことを示していて、地域に密着していることもわかります。

【謝辞】 貴重なお話と写真を見せて頂いた日高市高萩の原田昭様に感謝しお礼を申し上げます。

参考文献

- (1) 『アウトローたちの江戸時代』（府中市郷土の森博物館、2011年）
- (2) 高橋敏『博徒の幕末維新』（ちくま新書、2004年）
- (3) 今川徳三『日本俠客一〇〇選』（秋田書店、昭和47年）
- (4) 高橋修『甲州博徒抗争史論』（山梨県立博物館研究紀要 第七集、2013年）
- (5) 高橋敏『アウトロー 近世遊侠列伝』（敬文社、2016年刊）
- (6) 村松梢風『正傳清水の次郎長』（現代大衆文学全集第34巻）、平凡社、昭和3年）
- (7) 『飯能市史 通史編』（飯能市、）
- (8) 増田知哉『清水次郎長とその周辺』（新人物往来社、昭和49年）
- (9) 『日高市史 近世資料編』（日高市、平成八年九月）P.551～565



行平仙太郎の墓
 (2017年9月)

- (10) 上岡良「俠客武州寺谷一家聞き書き控」〔埼玉史談〕第25巻3号)
- (11) 「金毘羅大権現碑再建等の趣意書」(日高市高萩の同碑再建並びに整備委員会、平成29年3月)
- (12) 高橋敏『清水次郎長と幕末維新』(岩波書店、2003年)
- (13) 柳内賢治『武州ぶっこわし実記』(まつやま書房、1989年)
- (14) 『武州世直し一揆史料(一)』(慶友社、昭和49年)
- (15) 『毛呂山町史』(毛呂山町、昭和53年)
- (16) 『日高の石造物』(日高市、2015年)
- (17) 『広報はんのう』(飯能市役所、昭和61年11月1日)
- (18) 『飯能市史 年表』(飯能市、昭和57年)

〔あゆみ〕第42号、平成31年4月)を一部修正